

## [037\_1996]第三十七回中央図書館貴重文物展観目録 ： 伊勢物語の本 ： 本から版本

九州大学附属図書館中央図書館

今西， 裕一郎  
九州大学文学部 ： 助教授

<https://doi.org/10.15017/1485024>

---

出版情報：大学広報. 855, pp.13-24, 1996-04-26. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

## 開学記念貴重文物展観

「伊勢物語の本」～写本から版本へ～

(中央図書館)

中央図書館では、開学記念貴重文物展観(第37回中央図書館貴重文物展観)を標記のとおり実施します。

なお、展観資料の選定、解説、配列につきましては、文学部 今西祐一郎助教授をはじめ関係の方々にご尽力をいただきました。

### 主要展観資料の解説

伊勢物語は、10世紀前半にはその主要部分が形成されていたかと推定される歌物語である。内容は六歌仙の一人、在原業平の和歌を中核にした全125の章段から成る(但し定家本。他本は若干相違する)。各段、「むかし、男(ありけり)」という文ではじまり、その「男」の元服(初段)から老若貴賤を問わぬ女性との歌の贈答、さらに辞世の詠歌(125段)までを歌とともに綴って、「男」の一代記の模様を呈する。決して大部の作品とはいえないが、その後世に与えた影響はすこぶる大きく、『源氏物語』の光源氏、西鶴『好色一代男』の世之介は、ともに伊勢物語の「男」の生まれ変わりといっても過言ではない一面を有する。

このように、はやくから歌文の典拠として仰がれ、由緒ゆかしい古典と敬われてきた伊勢物語には、古今和歌集、源氏物語とならんで、膨大な写本、版本が今日に伝わるが、その一端は本学にも及んで、宇土細川家旧蔵の細川文庫、音無文庫、支子文庫を中心とした、伊勢物語およびその関連書物の少なからぬ蒐集を見る。

今回、鎌倉時代の古写本から江戸時代の絵入り版本まで、場所の許すかぎり本学蔵伊勢物語諸本を展観、もって伊勢物語鑑賞・研究の一助となし、併せて特別展示として、伊勢物語とも関係の深い歌物語で、本学が学界に誇る重要文化財、支子文庫本『大和物語』を展示する。

なお本学では、先に第10回中央図書館貴重文物展観(昭和57年3月)において、本学蔵伊勢物語関連書物18点を展観に供した。それらは今回も展示するが、解説はその折の展観資料解説(「大学広報」No. 434)に譲って省略した。

〔本文〕

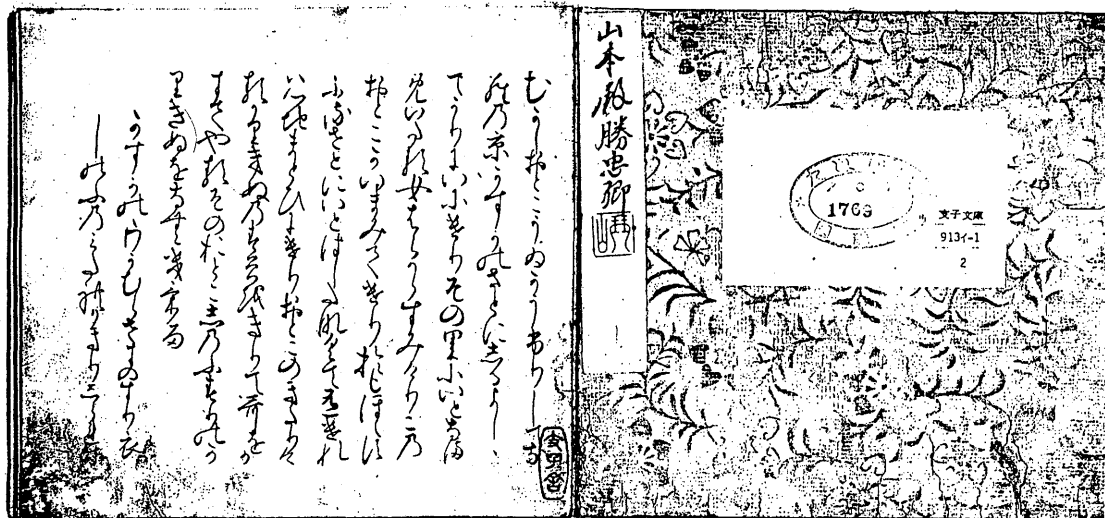
1. 伊勢物語 烏丸光広筆 近世初期写

大本 (21.9×17.3cm) 列帖装, 一帖。緞子表紙。左肩の題簽は, 金箔散らしに「伊勢物語」と墨書。右肩に「蜷川新右衛門尉 哥 烏丸光廣卿伊勢物語」の紙片を貼る。見返しは金箔散らし。「烏丸光廣卿 伊勢物語一冊 むかし男」と古筆極めを貼付。料紙は鳥の子。墨付46丁, 一面16行書, 一行20字前後。巻末に, 流布本系統の奥書を付す。

2. 伊勢物語 近世初期写

支子文庫。枡型本 (16.8×18.0cm), 一冊。墨付62丁。本文は, いわゆる定家本系統であるが, その内の天福本系, 武田本系, 流布本系, いずれとも決し難い。第六十五段の途中に, 歌一首 (さりとともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして) を含めた四, 五行ほどの脱落がある。

奥書はなく, 書写者や書写の経緯などの詳細は不明であるが, 緞子張の表紙に, 「山本殿勝忠卿」という古筆極め札を貼付。山本 (藤原) 勝忠は, 慶長13 (1608) 年生, 承応3 (1654) 年没, 参議正三位。



3. 伊勢物語 中院通純筆 近世初期写

細川文庫。大本 (23.7×16.5cm) 列帖装, 一帖。表紙は唐草模様に陶器模様が混じる。朱色の題僉を中央に付し, 「伊勢物語」と墨書。料紙は鳥の子。墨付69丁, 一面9行, 一行20字前後。朱で三ヶ所書き入れがある。もともとその本が入っていたと思われる箱はなくなっているが, その蓋が残されており, 裏には古筆了意の極書と花押があり, 表に「伊勢物語中院書写」の文字がある。

本文は天福本とほとんど変わらない。

中院通純（慶長16〈1612〉～承応2〈1653〉）は公家，権大納言。内大臣正二位通村の男。

4. 伊勢物語 藤原経孝筆 寛文元年

枳型本（16.5×17.7cm）列帖装，一帖。表紙は萌木色，唐草文様。左肩に題簽，「伊勢物語」と墨書。料紙は鳥の子。墨付82丁，一面10行，一行17字前後。

本文は天福本系統であるが，武田本，流布本系統のものと校合，異本表記を傍記。その他，朱点，人物表記が付されている。

奥書に「右一冊者隔海数千里遠邦人強依有所望終不得遁写秘伝本以染翰尤憚他見者也 寛文元年 神無月廿八日 大炊御門前内大臣 正二位 藤原経孝」とある。

藤原経孝（慶長16〈1612〉～元和2〈1682〉）は公家，寛文十年従一位左大臣。頼国男。

5. 伊勢物語 四辻公韶筆 近世初期写

細川文庫。大本（25.1×17.8cm）袋綴，一冊。墨付71丁，一面10行。

包紙に「四辻正三位公韶卿正筆 伊勢物語 一冊」と墨書。さらに「此上包紙書付古筆了音書 則是極礼に相成間冊かへ間輔候」の極礼を貼る。

本文は天福本系統。歌に集付を付す。本文の後に業平・行平・紀有常・二條后・河原左大臣融の略歴を示す天福本系統の勸物と，「なぞへなく」「みやび」などの釈義，これについて天福本，武



田本，流布本の奥書が続く。最後の丁には「墨付七十一枚 石井滋久入道了派に相極る」極札を添付。

四辻公韶は参議正三位。寛文10(1670)年8月4日生，元禄13(1700)年7月3日没，享年31歳。

#### 6. 伊勢物語 今城定経筆 元禄11年写

細川文庫。大本(23.8×17.0cm)列帖装，一帖。表紙は布製薄茶浅葱地に。金欄緞子(文様は不詳)。見返しは金箔雲霞模様。題簽は中央に「伊勢物語」と墨書。金箔雲霞模様。内題なし。本文料紙は鳥の子。墨付63丁，白紙3丁。一面10行，一行25字前後。和歌3字下げ。本文は定家本系統であるが，天福本及び武田本とも小異があり，流布本に含まれるか。書写態度はかなり精確で誤脱は少ない。奥書に「此物語令書写訖 元禄十一年二月上旬権中納言(花押)」とあり，付属する極め書に「伊勢物語筆者 今城中納言定経卿 外題 有栖川幸仁親王」(包み紙に「伊勢物語筆者」)とある。書写者の今城中納言定経は藤原氏，花山院家中山支流の第4代。明暦2(1656)年6月24日生，元禄15(1702)年2月26日没，権中納言正三位享年47歳。

#### 7. 伊勢物語 近世中期写

文学部蔵。大本(23.2×17.4cm)列帖装，一帖。表紙は縹色切箔地に金泥で草花文様。金泥模様の遊紙首2丁，尾3丁。題簽なし。料紙は金泥模様，鳥の子。墨付58丁。一面10行書。本文は流布本系か。集付を付す。卷末に業平の略伝，天福本・武田本・流布本奥書を挙げ，ついで「依紹巴法師所望凌老眼染筆者也/天文廿四孟秋上幹 稱名野釋判」「此伊勢物語者為消永日染悪筆者也/天正十年季春上幹 紹巴判」「頻依所望不順後覽嘲哂 横染之/元和龍軒四曆午仲秋望後/貞興判有」「吾各々の本依御所望慥写け 候 努々他見有ま敷者也」の奥書を列記。

#### 8. 伊勢物語 藤原喬任筆 近世中期写

支子文庫本。枡型本(16.5×16.5cm)列帖装，一帖。表紙は布製浅葱色地に金欄緞子菊花唐草文様。見返し金箔。題簽なし。1丁裏右上角に「矢野蔵書」の印。本文料紙は鳥の子，墨付69丁。一面10行，一行15字前後。和歌2字下げ。本文は流布本系統化と思われるが，書写態度は初段第一首目の和歌を「春日の、若紫のすり衣忍ふの乱そめにし我ならなくに」と写すごとく，全体的に精確さを欠く。奥書に「依或人所望渡筆記 藤原喬任」とあり，外箱上蓋右角に「廣橋殿 伊勢物語」と墨書。書写者藤原喬任については未詳，外箱の広橋氏は藤原氏日野家日野支流。

#### 9. 伊勢物語 源重孝筆 宝永頃写

細川文庫。大本(27.5×19.8cm)袋綴，一冊。表紙は布製薄茶色堅菱渦巻紋に金欄唐草文様。題簽は表紙中央に「伊勢物語 全部」と墨書。内題なし。1丁表右下角に「親冬」の印。本文料紙楮紙。墨付50丁，白紙2丁。一面12行，一行25字前後。和歌4字下げ。本文は定家本系統で天

福本及び武田本とも小異があり、流布本に含まれるか。書写態度は単純な誤脱がやや目立つ。奥書に「右或依所望令書写卒 侍従源重孝」とある。源重孝は庭田氏、宇多源氏。代々神楽を以て朝廷に仕えた。権大納言重條男。元禄5（1692）年10月25日生、延享2（1745）年12月19日没、権大納言正二位享年54歳。重孝は宝永3（1706）年、15歳で侍従従五位上、同6年18歳で右少将となっているから、この頃の書写か。

〔注釈〕

10. 知頭集 近世中期写

音無文庫。大本（27.7×18.8cm）袋綴、一冊。題簽は表紙右肩に「知頭集 上下」。墨付90丁。奥書は「元文五庚申如月廿日写之水竹居作録」「宝曆十二巳五月廿二日写之畢紙員九十葉」。蔵書印は「馬詰文庫」、奥書の次に「矢部」。

平安時代の歌人源経信に仮託された注釈書、作者は不明だが、鎌倉時代には成立していたと考えられる。『伊勢物語』の主要の章段（九大本では計70段）について、経信と住吉明神の化身である老人との問答を通して、登場人物の実名や事件の日時を明らかにしていく。『知頭集』の本文は、書陵部本系統と島原文庫本系統の二系統に大別できるが、本書は後者に属し、かつ島原文庫本には含まれない第49段の注釈を備える点で注目される。

11. 伊勢物語髓脳 近世中期写

音無文庫。美濃二つ切本（13.0×18.5cm）列帖装、一帖。表紙は藍色地に草花文様の地紋あり。左肩に題簽あるも、題字なし。料紙は鳥の子。他に『古今和歌集灌頂卷』『和歌秘傳抄』『古今集卷十物名』を合綴。墨付19丁。一面17～19行。奥書なし。『和歌秘傳抄』巻末に元禄14年の奥書あり。

本書は、在原業平の次男滋春に仮託した『伊勢物語』注釈書で、南北朝から室町時代初期の成立という。冒頭の総論部分では、業平が『伊勢物語』において男女の和合を教えることで世を救おうと意図したと説き、続いて滋春がそれに触発されて選んだ七箇条の髓脳が記されている。

該本は、片桐洋一氏の紹介された今一本の九州大学蔵『伊勢物語評註』付載『伊勢物語髓脳』と異なり、総論・深秘七箇条に続いて「伊勢二門極理灌頂撰」以下の増補部分を有する系統の一本である点が注目される。

12. 伊勢物語闕疑抄 細川幽斎著

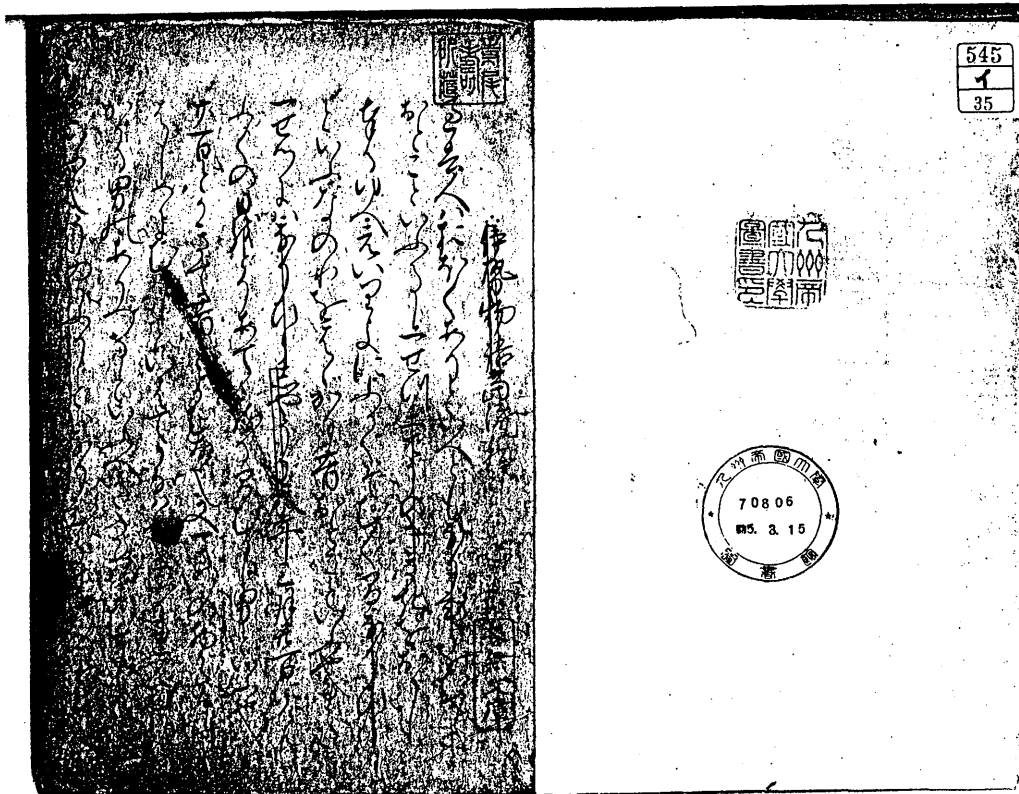
細川文庫。写本。大本（26.2×20.2cm）袋綴、二冊。柿渋表紙。上巻89丁、付箋16箇所。下巻94丁、付箋12箇所。朱で、天福本本文の校合、その他の書き入れがある。

本書は、三光院三条西実枝の講釈の聞書をもとに、愚見抄、肖聞抄など、当時までの代表的な『伊勢物語』の諸抄を集大成したもの。巻末に天福本・流布本。武田本の奥書・勸物・系図等を添える。文禄五（1596）年成。江戸初期における伊勢物語の享受、研究に多大な影響を与えたことは、伝存する写本、版本の数の多さから窺える。本書は、その中でも善本として片桐洋一氏によって紹介された京都府総合資料館蔵本（中院通勝奥書、法眼祐孝書写）と同じく、刊本になる以前の、原初形態に近い闕疑抄の本文の面影をとどめる。

### 13. 伊勢物語当流私 近世初期写

音無文庫。大本（25.6×17.6cm）袋綴、二冊。表紙は縹色無地の斐紙。題簽無し。本文料紙は楮紙。墨付上巻（四七段まで）74丁、下巻90丁。一面11行書。下巻巻末に「寛永十三年 極月十九日写畢 慶来作」の識語。朱で濁・句点を施す。

本書は、物語の内容にその年月日を想定し、登場人物を実在した人物にあてるなど、冷泉家流『伊勢物語』古注釈の一端に連なることを示す。また注釈形式は、「たうりうには……（略）こちうには……」の如く、「当流」注釈において「古注」を紹介する形をとる。「古注」は正徹自署本『伊勢物語』書入朱注や「伊勢物語奥秘書」（『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第二巻所収）に近く、一方「当流」注には儒教に基づく好色否定がみられ、これは宗祇及び三条西家流の『伊勢物語』注釈の反映と認められる。



このような、宗祇流注釈の影響下に成立したと考えられる点は、「伊勢物語懐中抄」も全く同様であるが、「当流私」「懐中抄」ではその本文・和歌・跋文などに若干の違いが見られる。例えば、「懐中抄」は「慶長九年九月吉日書之畢」の識語から、「当流私」の「寛永十三年」よりも早い成立であると考えられる。また「当流私」にある「慶来作」は「懐中抄」になく、代わりに「木二伝此一部の異名を懐中と名付けたり。云々」と書名の由来が付記されることから、両者は近接した年代に成立しながらも、伝来過程が異なる本であると思われる。

なお 本書はその翻刻が既にあり（『文献探究』23（1989）～25（1990）号。坂本信道氏による）、一方『王朝の文学とその系譜』（片桐洋一氏編、1991年刊、和泉書院）に「伊勢物語懐中抄」（解説翻刻／金井まゆみ、南出美和）の翻刻がある。

#### 14. 伊勢物語秘訣抄 延宝7年刊

音無文庫。大本（27.4×19.5cm）袋綴、十二冊。表紙は藍色無地。左肩の単辺の刷題箋には「伊勢物語秘訣抄 一（～十二）」とある。右肩には、明治三十七年記の石河光治の「蔵書之記」を貼付。本文料紙は楮紙。墨付、各巻平均25丁。本文一面12～17行。十二巻末に「延寶七年己未九月二十一日 中野太郎左衛門板行」の刊記。

本書は、序によれば、伊勢物語を学ぶ「あるやんごとなき息女」の所望に応じて、「諸抄を講釈のごとくに」平易に書き記して、読みくせや口伝を残らず書き添えたものである。また、序の記述から、婦女童蒙向けの著述を意識したと指摘されている（田中宗作『伊勢物語研究史の研究』）。

ところで本書は、先行する『伊勢物語器水抄』『伊勢物語集註』と記述の重なる部分が多く、これらの注釈書を継承したものとする見方があった。しかし、本書における『器水抄』『集註』の中の削除・改変・批判などに見出される傾向から、道徳的な教戒色を避けようとする特徴、また、従来の道徳的な文学観に対して自由な態度を有する特徴をもつことが明らかになった（田中葉子『伊勢物語秘訣抄』について『語文研究』68号）

#### 15. 闕疑抄初冠 加藤磐斎著 万治3年刊

音無文庫。大本（27.2×19.5cm）袋綴、五冊。加藤磐斎著。萬治三（1660）年刊。細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』に頭注を付したものの。

頭注には、愚見抄、惟清抄、肖聞抄、真名本、「闕疑抄の頭書」などの先行注釈書をはじめ、和漢の典籍を引用する。特に、「頭書」「首書」の形で用いる「幽斎闕疑抄のかしら書」（巻二・2・オモテ）に依るところが大きい。また、「裏の説」や「七ヶ大事」に言及するが、その内容には触れず、条目を掲げるにとどまる。うち、「七ヶ大事」は、別掲『伊勢物語口伝』の「七ヶ大事口伝」にあげる条目と一致。なお、この「七ヶ大事」は後に磐斎が著した寛文八年（1668）刊『伊勢物語新抄』にも同じ指摘が見える。



## 16. 伊勢物語裏ノ説 近世中期写

音無文庫。半紙本(22.6×15.0cm)袋綴,上下一冊。著者,書写者未詳。表紙は茶色縦縞に横刷毛目。題簽剥落。装丁は『伊勢物語再問秘訣』と同じで,書写者も筆跡により同一人物と推定される。内題1丁表左肩に「伊勢ノモノカタリ裏ノ説」と墨書。本文料紙楮紙,墨付8丁(上巻4丁下巻2丁半),一面14~15行。朱による頭注・傍注(本文と同筆)あり。奥書なし。上巻には「うるかうふりして」等14箇条,下巻には「いもうとのいとおかしけなる」等8箇条を見出し語とし(朱で合点),注釈部分は漢字片仮名混じり文で,見出し語より1字下げて小書する。本書は二条家流の「裏ノ説」(口伝)をまとめたもの。松永貞徳周辺の人物の手になるものか。「御説」(三条西実枝),「師説」(松永貞徳),「一禅ノ御説」(一条兼良),「恕堅」(未詳),「私云」(朱で印)を主とし,「山口記」,「蝠斎説」(集註),「再問別冊」(再問秘訣か)などをあげる。

## 17. 伊勢物語再問秘訣 近世中期写

音無文庫。半紙本(22.6×15.0cm)袋綴,一冊。著者,書写者未詳。表紙は茶色縦縞に横刷毛目。題簽剥落。装丁は『伊勢物語裏ノ説』と同じく,書写者も同一人物か。内題1丁表左肩に「伊勢物語再問秘訣」と墨書。墨付22丁,白紙1丁。一面8~16行,一行24~28字。3丁裏と6丁裏に付箋各1枚。朱による頭注・傍注(本文と同筆)あり。本書は松永貞徳周辺の人物の手になるものかと思われ,『伊勢物語裏ノ説』著者と何らかの関連があると想像される。冒頭,「右ノ通切紙相伝ノ時聞事也」として「題号」「二ケノ極秘」「七ケ秘事」,「裏説上巻(下巻)分」「物語ノ中難儀五ケ條」の各条目をあげ(末尾に「亦読クセ清濁有之」),4丁以降初段「むかしおとこ」以下51段分75項目に渡って注釈し,主として「御説」「師説」「一禅御説」「恕堅ノ言説」など『裏ノ説』と共通する説をあげる。

## 18. 伊勢物語口伝 近世中期写

音無文庫。半紙本(23.0×16.3cm)袋綴,一冊。表紙は灰色斐紙。題簽左肩に「源氏物語三ケ秘事 伊勢物語口傳」と墨書,その下に打ち付けで「徒然草三箇大事 伊勢物語裏説注 同口訣聞書」とあるのが見える。料紙楮紙。墨付25丁。一面10~16行,一行16~24字。朱で合点などが入る。最終丁奥に「行真」の印(1丁表にも),及び本文と同筆で「悦誉之」とあり,「行真」は所蔵者,「悦誉」は書写者と思われる。

本書は題簽にあるように同筆の『源氏物語三ケ秘事』などと合綴されており,12丁表から23丁裏までが『伊勢物語口伝』にあたる。加藤磐斎(元和11(1625)~延宝2(1674))の判を有する切紙を集めて書写したもので,「伊勢物語裏説并清濁七箇之大事口訣条目切紙」以下,「伊勢物語口訣聞書」「伊勢物語裏説口伝」「伊物清濁第一(~四)」「伊勢物語七ケ之大事」「伊勢物語之名目 一花堂聲句」など二条家流の『伊勢物語』口伝を記す。本書の体裁は,稲賀敬二氏が紹介された広島大学文学部国語学国文学研究室蔵『伊勢物語口訣』とほぼ同じであるが(「伊勢物語奥旨

秘訣」「伊勢物語口訣」解説並翻刻(一)(二)『中世文芸』31・32号昭和40年3月・7月), 同書にはない磐斎による萬治3(1660)年5月5日の日付を有する奥書を持つ。

### 19. 伊勢物語抄 近世中期写

音無文庫。大本(27.7×19.9cm)袋綴, 二冊。書写者未詳。墨付上下巻とも113丁。一面12行。題簽なし。上下巻の表紙には各々「伊勢物語 伊」「伊勢物語 勢」と墨書。下小口には「伊勢物語抄集 愚, 祇, 勢, 肖, 惟」とあり, 内容はその五つの注釈書(愚見抄・伊勢物語山口記・肖聞抄, 惟清抄等)の抜き書きから成る。朱筆による読点, 人名に朱線が入る。

### 20. 伊勢物語聞書 近世中期写

音無文庫。大本(30.7×22.3cm)袋綴, 一冊。著者, 書写者未詳。表紙本文料紙共に鳥の子(後表紙か)。題簽なく, 表紙左肩打ち付けに「伊勢物語聞書」と墨書。14丁表に内題「伊勢物語聞書」。本文墨付38丁, 一面10行, 一行20字前後。奥書なし。本書は, 表紙に「伊勢物語聞書」とあるが, 前半13丁までは左大臣藤原冬嗣仮託の偽書で, 女中詞・俗説・異名等を女訓物や随筆等から抜粋し集めたもの。後半14丁以下が内題通り『伊勢物語』注釈で, 「初段 一うるかうふりとははしめてかふりをきたる事云也」のごとく簡単な注釈を行う。注釈は全ての章段に及んではおらず, 8, 11, 20, 32, 33, 48, 53, 55~57, 64, 68, 72, 74~76, 89~92, 106, 109, 112, 113, 115, 122~125段を欠く。項目数の割りには引歌が多く, 主要な古注釈書に見えない歌も相当数存する。最終丁に「百廿六段 已上」とあるが, 全126段存するのではなく, 本来の第85段を第86段と誤認したため, 1段多い。(中条順子「九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について」(『文献探究』第4号 昭和54年6月)参照)

### 21. 伊勢物語聞書 近世中期写

音無文庫。半紙本袋綴(23.5×16.4cm)一冊。著者, 書写者未詳。表紙は藍色斐紙に堅菱渦巻紋型押し。題簽なし。内題1丁表中央に「伊勢物語聞書」。本文料紙楮紙, 墨付108丁, 一面12行, 一行20~27字程度。和歌2字下げ。奥書なし。内容は牡丹花肖柏の『伊勢物語肖聞抄』に近く, 宗祇周辺の人物の講釈の聞書の転写本かと思われる。冒頭に定家本系統流布本の奥書をあげて注釈し, 題号・作者等に触れる。本文は「昔」「男」「うるかうふり」などに見出し語をあげて説明し, 章段初めには○, 見出し語には△が朱書。注釈は先行諸説の引用等, 『肖聞抄』と密接な関係にあり, 『肖聞抄』にない冒頭の流布本奥書の注釈でも『肖聞抄』と同じく伊勢筆者説をとる。また『肖聞抄』にはない引歌・例歌が新たに加えられている。(田坂憲二「九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について」(『文献探究』第4号 昭和54年6月)参照)

## 22. 伊勢物語勅講抄 近世中期写

音無文庫。大本(26.7×19.2cm)袋綴、一冊。表紙は藍色無地。左肩の題簽には「伊勢物語聞書」と墨書。本文料紙は楮紙。墨付、91丁。一面14行。奥書の類はなく、巻末は「本に末の段なし」という記述で締め括られている。終焉の段を読まないのは、宮中での伊勢物語講釈の作法であったという。

本書は、明暦二年の後水尾院御講釈の際の聞書である。内題の「聴衆」の項目において、妙法院以下三名の後に「具記等也」と記し、他四名の名前を略していることから、この聞書は岩倉具起によるものと推定される。内題によれば、この年の講釈は、八月二十二日から九月二十九日まで十二回にわたって行なわれた。

行頭・行間に朱の書き入れが多く見られ、頭部余白に細字で注釈を記す。記述の体裁や内容は、京都大学研究室蔵本『後水尾院御講釈伊勢物語聞書』と酷似。

岩倉具起は、慶長六(1601)年生～万治三(1660)年没。久我の庶流、木工頭岩倉具堯の男。従二位、権中納言。後水尾歌壇で活躍。

## 23. 伊勢物語抄

音無文庫。書写者未詳。大本(24.8×17.1cm)、一冊。墨付86丁。一面13行。緞子表紙。見返し金箔。一丁裏に「伊勢ものがたり壺巻古写書」と別筆。

内容は肖聞抄。奥書なし。大津有一著『伊勢物語古注釈の研究(増訂版)』に文明十二年本として紹介。巻末に系図を付し、流布本の勘物と業平の略歴、武田本の勘物をおく。

## 24. 伊勢物語しのぶ摺抄

文学部蔵。大本(27.0×19.3cm)、袋綴、2冊。全92丁。外題は、表紙に打ち付け書き。「伊勢物語しのぶすり抄上下 一条禅閣御説紹巴聞書」という内題を付す。奥書には、「慶長九曆申辰仲秋日」とある。

序文には堯孝の名が見い出されることから、二条流の注釈であろう。著者は未詳。但し、この序文が、元来、原「しのぶ摺抄」とも言うべき、本書とは別種の本に付されていた可能性も高いという。また、奥書には、内題の示す通り、一条禅閣(兼良)の説と紹巴の聞書を以て書写した旨が記される一方、注釈内容は、『伊勢物語宗長聞書』や『肖聞抄』と同文を多く含む(鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊題3巻「伊勢物語忍摺抄」解説)。堯孝は、頓阿曾孫。室町時代、二条派の中心歌人として活躍した。東常縁は、その門下。『慕風愚吟集』の他、『堯孝法印日記』『桂明抄』などの著作がある。

## 25. 伊勢物語秘註 近世中期写

音無文庫。大本(27.5×22.3cm)袋綴、三冊。表紙は柿渋色無地。左肩の題簽に「伊勢物語秘

註 上(中・下)」と墨書。料紙は楮紙。上巻39段まで、中巻85段まで。一面14行。本文中の所々に、朱で書き入れ。下巻末には、「右伊勢物一部者諸説勘合師説之秘注也 不可有他漏脱也」と識語、ついで「此本者二條家本説勘合師之相承之秘本たりといへとも年来懇望之上感歌ニ厚心而老後ニ書写相校るのみ尤如誓盟之他見有へからさる者也廬錐齋南浦居士素慶 享保四己亥仲夏吉辰阿闍梨妙辯雅隱 右従長雅翁南浦伝受之趣也」とある。

本書は、愚見抄・肖聞抄から紹巴の注や闕疑抄に至る二条家流の説を勘合し、さらに師説を加えたものである。この音無文庫本以外に類本は見られず、これが唯一のものと思われる(大津有一『伊勢物語古注釈の研究 増訂版』)。

平間長雅は、寛永十五(1638)年生、宝永七(1710)年没。望月長好門下の歌人、歌学者。

## 26. 伊勢物語

支子文庫。書写者未詳。栞型本(24.0×19.0cm)列帖装、写本。外題内題ともになし。料紙は鳥の子。墨付80丁。さらに巻末3丁分に、他阿上人、作者未詳、木下長嘯子、人丸、春道列樹の和歌を記すが、後世の書き込みの可能性はある。

本来は二冊本だったと推定されるが、現在では下巻を欠き、総論と『伊勢物語』初段から第63段までの注釈のみを伝える。各章段の登場人物に具体的な人名を指摘するという、いわゆる古注の方法をとるが、一方で、「古注」を批判し「當流」の説を展開するという二条家流の特徴も確認できる。大津有一『増訂版 伊勢物語古注釈の研究』に田村専一郎氏所蔵として紹介、「二条流の注釈書か」とされる。

## 27. 伊勢物語残考 高井宣風(春雨亭)著 文化5年刊

大本(26.5×18.3cm)袋綴、三冊。「文化五年十二月/門人今樹、杜風、常安発行/江戸麹町平河三町目 彫工細字茂八」の刊記あり。本文を句ごとに切り、その下に細字双行の形で注釈をほどこす。巻末の後記(宣風のものか)によれば、「初学のわらへの手引書」を目的として上梓したもので、「故人のもらせしを考」えたものゆえ、『残考』と名付けられた。

著者の高井宣風は江戸中期の歌人。信濃に生まれ、後、江戸で萩原宗固や日野資枝等に從事する(『国学者伝記集成』)。本書巻末に付す『春雨亭書目録』には、宣風の著として、他に『近世和歌名家集』『後違考』『筒物語』『詞寄假名遣』『和歌組題集』『古事記序訓註』『万葉集残考』の名が見える。

## 28. 伊勢物語図絵 文政8年刊

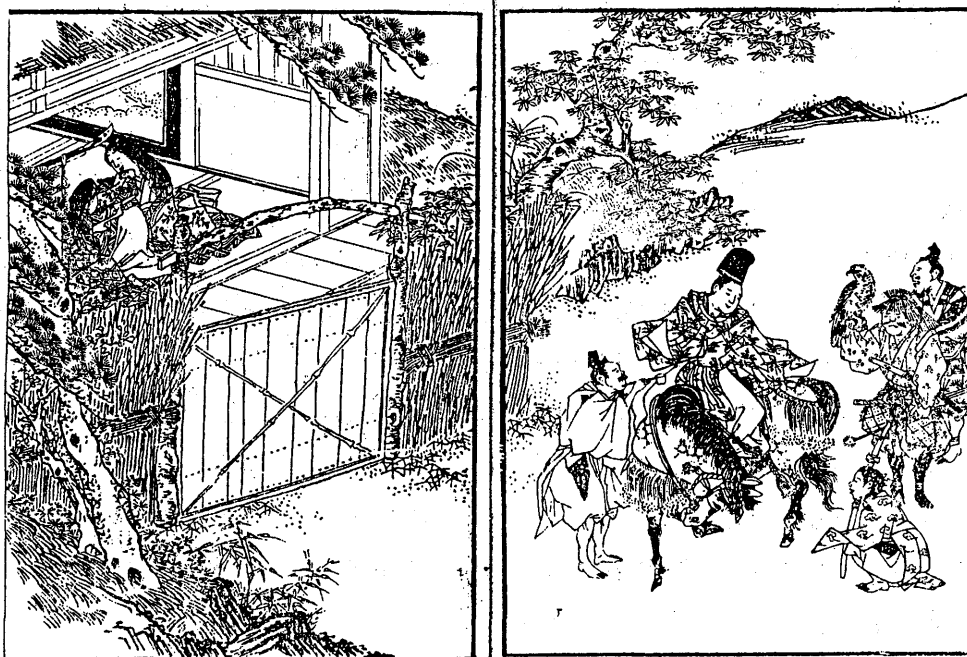
支子文庫。大本(25.7×18.1cm)袋綴、三冊。表紙左肩の題箋に「校訂伊勢物語圖繪 中(下)」(上巻題箋は剥落)。内題なし。料紙は楮紙。墨付上巻(49段まで)69丁(うち挿絵41丁)、中巻(78段まで)45丁(うち挿絵31丁)、下巻64丁(うち挿絵43丁半)。一面10行書。上巻巻頭に

市岡猛彦による「伊勢物語序」，下巻巻末に「文政八年乙酉秋」の刊記。

市岡猛彦の序文によれば，本書は「或人」が「あらため訂（タゞ）し」た本文に，猛彦が真名本による校合を付記したもの。挿絵は嵯峨本と場面・構図ともに異なるものを多く含む。

市岡猛彦は，尾張藩士で本居宣長・春庭の高弟。天明元（1781）～文政10（1828）。47歳。

また挿絵画家として序文に名の挙がる「難波人法橋玉山」は，岡田玉山。大阪の人。月岡雪鼎に学ぶ。元文2（1737）～文化9（1813）。76歳。



## 29. 伊勢物語 寛政13年写

半紙本（23.0×15.9cm），4冊。墨付平均75丁。表紙には，題簽剥落の跡。内題はなく，「いせ物語」という小口書があるのみ。奥書に「寛政十三辛酉のとし きさらぎ七鳥写之畢」とある。著者や，書写の経緯に関する詳細は不明であるが，筆跡から推すと，少なくとも二人の筆によるものと推察される。

総論では，まず，伊勢物語の名称と伝本に関する諸説を集成し，ついで，業平の官位は伊勢物語よりも古今集を重視すべきことを説く。そして，この物語が上巻（四十八段）と下巻（七十六段）に分かれており（本文は，定家本と同じ百二十五段。），いわゆる嫁入り本には，この全百二十四段中，業平の終焉を記す二段分を載せないという故実を記す。

注釈の内容は，一条兼良や三条西実枝，後水尾院，細川幽斎の説などを引きながら，他の物語類の用例や，類歌，影響歌などを指摘する一方，伊勢物語諸本の本文異同にも目を配り，真名本の漢字表記にも言及する。